

かいほつ

57号

題字 竜美丘小学校
5年 山田 昌広

岡崎市現職研修委員会
特別支援教育部会
(特別支援学級部会)
平成19年12月 4日 発行



大豆がとれたよ！(矢作南小)



子供のエネルギー

矢作北小学校長

大須賀 晴夫

中学校に勤務していた時には、特別支援学級の教科指導の一部を担当することがあった。多くの場合は週二時間程度ではあるが、生徒たちの興味心を喚起する授業を行うためには、今まで以上に指導方法の工夫が常に必要であった。その分、生徒たちに対する思い出はいつまでも残っている。その中でも、十数年前に出会ったM男君は、特に印象深い。

まず、彼が中学校に通うには、克服しなければならぬ環境があった。その一つが、彼の家は学校からかなり離れているため、自転車通学をしなければならぬということであった。しかも、同じ地域には他に中学生はいないため、他の地域の自転車通学者と合流するまでは、一人で来なければならなかった。周囲の者は心配と不安を持っていたが、彼は三年間、自転車通学をやり遂げた。

彼が入学してきた時には、特別支援学級には三年生の生徒がいたが、彼が二年生、三年生の時には彼一人となり、淋しい思いをさせることになった。特別支援学級で何か行事をしたり、企画をしたりする時に一人では限界がある。その場合は、交流学級の生徒や教職員と一緒に言い、少しでも彼に幅広い経験をさせることにした。それが家庭の事情もあって、卒業後はすぐに就職しなければならぬ彼にとって、重要だと考えたからである。幸いにも彼は、卒業後に近くの工場に就職することができた。

そんな彼から、二・三年に一度、近況報告を兼ねた年賀状が届く。今年の年賀状には、次のようなことが書かれてあった。

『ぼくはまじめに一生けんめいがんばって、はたらいております。たいへんですが、きちんとやっています。いい年でありますように。』
彼の近況については、私なりに把握してはいるが、彼からの近況報告が届くとうれしくなる。このように、自分を取り巻く困難を克服し、成長していく姿を見るたびに、改めて、子供自身を持つエネルギーの大きさと、家族や教職員そして周囲の人々の支援の重要性を再認識させられる。

子どもと親の集い フロック交流会

少しの改革がら

六ツ美・六ツ美北

六ツ美中 教諭 蜂須賀 隆

六ツ美地区の小中学校七校の交流会が、総勢九十余人で行われました。今年度の特徴は、昨年度の反省に基づいて、学校ごとに活動するのではなく、他校の児童・生徒を知ることや仲良くすることを主と考えました。

例えば、食事会も全員を四つのグループに分けて円状に座り、自己紹介をした後、簡単なゲームを行いました。

特に六年生は、活動的な中学生の様子を見て、より進路（中学校）に興味を持ったことと思います。



「交流会の絵」

六ツ美西部小学校 五年 倉橋 愛



自己紹介の様子

楽しかったふれあいデー

竜南・東海

竜南中 杉浦 光

五月二日にふれあいデーをやりました。小学生が楽しめるようになぞなぞのクイズを考えました。調理室でクッキーを作ったりクイズやゲームをしたりしました。クッキー作りのときに、型をぬく仕事で時間がかかって大変でしたが、みんなでやったのでうまくできてよかったです。上地小学校のAくんと一緒にお弁当を食べて、遊んで楽しく過ごすことができました。クラスの子の親と一緒に会話したり、カメラを使って楽しんだり、おもしろいクイズを出してみんなを楽しませることができたことが印象に残っています。

研究会報告

教諭 本田 健

東海中学校

「笑顔でチャレンジ」する作業学習として花台作りの授業を提案しました。花台作りのよさは、まず作業製品の利用価値が高く、生産から消費への流れが理解されやすいこと。次に障害の状態等が多様な生徒が、共同で取り組めること。さらに、参加する喜びや成就感が味わえることなどがあります。成功させるために「文化祭のバザーで販売できるものを作ろう」と意欲を高めるとともに、のこぎり切断補助具や自作組立補助具を使って誰でも手軽にできる工程を生み出し、生徒のポテンシャルを引き出しました。

自作組立補助具



ニス塗装中

三教研夏季研修報告

竜海中 教諭 瀬戸 藤代

八月三日、「一人一人の教育的ニーズに応じた教育のあり方をめざして」をテーマに、三教研夏季研修会が「ライフポートとよはし」にて開催されました。三百五十余名の参加者のもとに、第一分科会から第七分科会で十四のレポート提案があり、第七分科会（作業学習・進路学習）で、「一人一人の実態に合った授業をめざして」作業学習の「製品作り」を通しての授業実践を発表させていただきました。中学校を卒業してからの生徒たちは将来の職業生活や社会自立に向けて生活する力が必要で、その力となるのが、各教科の内容を総合的に含めた作業学習もその一つです。一人一人の実態を的確にとらえ、作業内容や作業活動を工夫し、生徒の意欲を引き出し、活動の充実を図ってきました。

助言者の白井先生（豊橋・植田小）から各学校の地域や生徒の実態に合った内容で、教科領域全般で伸ばし、不十分な部分は教科ごとにピンポイントで補っていくとよい、とご助言をいただきました。午後からは愛教大・都築繁幸教授の「特別支援教育を考えながら学校をリフォームする」講演がありました。



社会見学会

岡崎ライオンズクラブ

岡崎ライオンズクラブ様が、今年も市内の特別支援学級の小学生二百二名を社会見学会に招待してくださいました。九月二十六日、名古屋港水族館へ八台のバスで出かけました。イルカやシヤチのショー、ペンギンなどを実際に見て、子供たちは目を輝かせました。昭和四十年から招待を続けてくださっている岡崎ライオンズクラブ様には、感謝の気持ちでいっぱいです。

社会見学、ありがとう

大樹寺小 河井 克世志

ぼくは、水ぞくかんへ行きました。バスの中で、ライオンズさんに「おしごとは、なんですか。」とマイクで聞きました。ライオンズさんは、「うどんやです。」と答えてくださいました。ぼくはうどんが食べたくなくなりました。うめぼしのおにぎりと、からあげのおべんとうがすごくおいしかったです。水ぞくかんではシヤチのクーを見ました。クーがザバーンととんだとき、しお水がかかりました。ぼくは、大きなクーのつてみたくなくなりました。ライオンズさん、今年もありがとうございました。

保護者の声

岡崎小 丸山 里恵

今年の社会見学会は名古屋港水族館。親子ともに二回目の参加で、とても楽しみにしていました。

行きのバス車中では、自己紹介とライオンズの方々との質問タイム。じゃけん大会で盛り上がったところで到着。たくさん魚やペンギンを見つ、メインはイルカとシヤチのショー。水中で泳いでいる姿を真近に見ることもでき、イルカのかわいさ、シヤチの迫力に子供たちは大喜びでした。

このような楽しい思い出を作ってくださいましたライオンズクラブの皆様、関係者の方々、本当にありがとうございました。



ペンギン一家 根石小 高橋 憲史

学級活動

谷村 彩希

矢作中学校

海に行きました。海水よくをしました。おくわき先生の上ののりしました。「おもしろい！」

と、先生は言っていました。すいかわりをしました。私がおしかったです。でも、他の子がすいかをわけてくれました。そして、みんなで食べました。

おもしろかったです。キャンプファイヤもやりました。スタンプもやりました。火舞いも、がんばりました。一生けんめい練習して、本番もがんばりました。やけどをするかと思いましたが、上手にできました。九組の海の学習はとても楽しかったです。



うまくわれるかな？

学級紹介

細川小学校



おいもほり

教諭 後藤 久里子

細川小学校一年三組は、男子四人のとてもにぎやかなクラスです。入学して八か月たち、けんかもするけれど、みんなで楽しく活動できるようになってきました。

十月には、いも掘りをしました。収穫したさつまいもでふかしいもや蒸しパンを作り、一年生を招待して「おいもパーティー」を開きました。

いもほり

藤岡 真也

きょう、ぼくはいもほりをしました。つるをうーんとひっぱって、はこにいれました。もぐらみたいにほったよ。でっかいいもがいくつかとれて、うれしかった。

NAS-FD 2007 世界水泳大会に
参加して



東海中卒業生
中川大輔選手のお母さん
中川 直美

知的障害と診断された頃の大輔は、手に負えないほどの多動でした。ところが、池や川、プール、水溜りを見つけると、いくら促しても頑として動かず、どんなに冷たく深いところでもどろんどろん入っていききました。その様子を見て、早く水泳を習わせようと思いましたが、保育園に入ると同時に週一回スイミングスクールに通いました。小・中学校でも、水泳部に入り、先生の指導の下、友達と練習に励んで大会にも出してもらいました。中三で部活を引退し、もう大会に出ることもなくなると思っていたら、障害者の水泳大会があることを知り、コーチの指導の下、日本各地の大会に参加しました。その成績が認められ、世界大会に行くことができました。でも、ベルギーでは、メダルが取れず、大輔も悔しかったようです。次期大会に向けて毎日練習を続けていますが、養護学校を卒業後、水泳を続けていける環境ではないかもしれないですね。しかし、努力することは無駄にはならないと思っています。大輔は、水泳を通してたくさんの方々と学び成長してきました。後輩の皆さんも、好きなことを見つけ、頑張ってください。「継続は力なり」です。

子供たちと共に歩んだ四年間

元本宿小 野村 たづる

「おはようございます。」朝一番に目を輝かせて胸に飛び込んでくる天使のような子供たちと別れて、早八か月が過ぎました。

私が特別支援学級の担任になったのは、四年前のことでした。交流では、支援学級の子と接していましたが、担任としては初めてで、全てが新鮮で、新任のような気持ちで毎日充実していました。

初めは、一人一人の子供の能力や家庭環境などを知るために全力を注ぎました。その子にあった計画を立て、無理をせずに、その都度修正しながら指導に当たりました。時には、立ち止まり、どうしたらよいか悩むこともありましたが、そんなとき、私には何ができるか考え、子供のためになることを優先し、慌てずゆっくり子供を見て子供の中に入り共に過ごしました。子供たちの笑顔や純真さに何度も助けられました。子供たちの小さな進歩にも、抱き合って喜びました。保護者の方々と交流先の先生に支えられた四年間は、私の一生の宝物として、心に残っています。



子供たちと牧場と私

元豊富小 荻野美奈子

季節が変わるごとに、学校や子供たちのことを懐かしく思い出しています。春や秋には、学区にある片岡牧場へ子供たちと通いました。

片岡さんのご家族は、ふれあい学級とひまわり学級の子供たちをいつも笑顔で迎えてくださいました。子供たちは、乳搾りや糞かき、餌やりなどの仕事をみんな進んでやりました。

どの子も牧場が大好きでした。牧場では、子供たちが泣いたり怒ったりしたことは、一度もありませんでした。子供たちの目の輝きやたくましい働きぶりに、私は子供たちの秘めていた力を見せてもらった気がし、驚きとうれしさを感じました。

昨年度は、絵と文で「片岡牧場物語」を作りました。牧場で仕事をした後、スケッチブックを渡すと、子供たちは自分で描く場所を決めて座りました。牛をじっと見て一筆がきのように描き進めていく子供たち。自分の目の前に描きたいものがあると、こんなにも生き生きと描くことができるのだと感心したものです。

片岡牧場での体験活動の中から、私は大切なことを学ばせてもらいました。



特別支援学級でいただいたもの

元南中 塚本 緑

南中学校で特別支援学級を担当させていただいた六年間は、私にとって大きな恵みでした。今でも勉強したことや語り合ったことが、鮮明に思い浮かんできます。

初めて特別支援学級を担当し、理解することの難しさを学びました。障害があるどの子にも、理解してもらえないという疎外感をどこかで抱いていました。まず、自分が理解しようとしていなかったと思います。他の先生方や書物、そして研修会から障害について学び、初めて生徒やご家族の苦しい思いが分かりました。その上で、自立のための課題を共に克服していくのが自分の使命だと思いました。

そのうちに特別支援学級の子がもつ尊い輝きが見えてきました。それは、ご家庭の方々の姿でもありました。苦しみを優しさや強さといった人間的な深みに昇華させていらつしやるのです。何度も自分を恥ずかしく感じました。

今、姑が介護施設に行った後、週に二回、近くの小学校の特別支援学級にボランティアに行っています。それは、あの輝きを今もいただいで、自分も輝きたいと思っているからです。